



仇の原を危くし海
むさや程の標を
付ふるや物に我
其の海を危くする



海を危くする



もの如ん余の歌字は
何は是れ別是の之
み構ひ申して汝の
借ゆを程んぞいふ

浪華

好鷺鳥廬

葭城

てきふ
さき
條風の
鳴る

右申賞一吟
以贅于敘詞

洛の自春五始山七西氏の
支流を以て風俗を弘む
作の柳條の門を以て久しく
功あり今春五始の号を以て
堂とあり、わ道好く人の
便なるゆゑと祝を以て送る

南羅園

植添ささり植えささる苗 竹垣芽

敬存存生るも道徳の
ちよとちよとふはれと厚
かうらち人と本後ひぬ
今甫羅國のすめら忍ひ
自首堂と号する自祝

梅是か 柳條

賀辭

柳條くく威名ふるきに
又け仲春師のま号は
あはれつゝ目く交ル上ル
同慶一 喜字は口呈は

五流の

娘一呈其何との衣文志 女媒

全

海の翁号は堂と号
敬して道とふわき
江見氏のまは祝一と

五赤菴

鶴指少道は誰居まはの鶴 雲和

沐の舞を吹く阿ふに
堂持ある柳條主人を
賀ししとく

浴泉庵

才女ははく家の風を柳の
為掌

一尾札賀

中嶋氏

速し道照照せよ初梅 貞運

全

中嶋氏

弥増尔栄人梅の芽枝分 春甫

柳條のけし沙のきこ死に
まらむは祝しとく
一軒舎

海棠之葉を伝石ふの承 養古

四季

梅遠くをか子か梅のほろ解

葉あけけく葉へ降きとく月白

妻乞の麻糸を懸てはるる

織りのほむき習ひてはる

自前の葉を伝てはる
ちの柳條のけしとく

五和堂

其道の風を柳の 吾立

祝辭

柳條のあけく道とよせん平野の
予幸あすしめは長寿南を園と告て
板敷の舟を返まるとし尔諾しと歸の
号は堂より一舟と海とく道とく
是を自鏡しと並くとく初らむ
予も同門と初らむと初らむと初らむ
しとの初らむと初らむと初らむと初らむ
きつと身を初らむと初らむと初らむ

五湖海

戒をばつらむとく一とく道の道

蛙春

漱の小船を慎みの暮

柳條

舞の雀足下は初らむとく

菊芽

仰向斗のむつとく組

魚吐

おこは本の宮と月の影とく

亀猷

すこ聴た静なりとく虫

猷母

琵琶の糸を流しとく並をとく

團湖

はり星のまひ小下種

一善坊

まひとく此とくまなりとく

把柳

海山の遠きと果林とあくとく

芝る

連山崎とく初とく初とく

柳條

海山崎とく初とく

楓葉

尾崎の糸とく初とく

初とく初とく初とく

緑波とく

ふと室とく初とく初とく

亀猷

文臺之記

玉照菴柳條のま農事代
家端の儀り自省堂と閑在
し新尔文臺を造り宗業を
初るき門に柔次弘ゆと雅俊はの
志砂を尋ね福と云々の居工と
初らひ漆を引画と云ひ承く
初る後道の年行終つたるも
此のつて侍る長柄のま急は初ら
當りよふんは働ん今々の世に當る
切のまのまの金と祝し一盤并々
はくさるまを茶を蔵書

新田之河を極まも皆涼—— 蒲葎

天明元之の夏秋雨
新田の日記

天明元辛也夷別於自省堂

宗元之詠諧

あつた五月のふぢを挿く

ふ月之月意ふ乃山うつ々 柳條

導く子子子代姑ふ秋 熊趾

まをふふあるな何と申す何と 其照

是れ祝新尔吹 蚊友

本成新の庭、從身一と斤時白 露石

ちらサ厭りや急く 夜行通 秀曉

鳥の凄ふ本とる 明のま 龜猷

ふおまし一條の風の叫 物星

短しわくつたが新尔ふのま 蒼里

サマをなす 独繻る 書 柳條

去身より 彼より科の 月の思 能山

後り 切らる 山の 新し 其思

徒ら 徒憂サを まきしを 遠 狂 蟻友

五 弘心 十 本 あり ぬる 柴の 戸 糸 獄

取ら 以 糸 結 集 り する 海 之 支 物 至

神 袖 け 律 き け 夏 の 通 路 蒼 里

分 せ る 赤 糸 の 蔭 き 糸 の 空 露 石

船 飛 音 也 朝 の う ち 枕 業

下畧

難波津の御ハ玉姫の原より

今もく柳條主人は道侍人

け 糸 結 する け 石 の 志 する 糸 瀾 湖

立ル 之 質 しく

代 々 葉 も 甚 ぶ る 花 梅 の 風 五 遊

柳條まゝごとく 梅の難波津

久のうをさきけ 道の根葉り

難波津の 葉 志 する 糸 柳 糸 櫻 鶴

全

燕の 孫子 さら する 古 葉 糸 燕 賀

風流の園大を記す所のあり

全
井上氏

月影如ありてしる柳の可及

今春京都故人の病をうき
又書とあさわめしむと笑し風竹舎

おのつり振うつるる柳分五葉

難仲の起りルをさあひ
人の名おにあらはるる

堪吾舎

白やうくあき病もさの吉路人其柳

柳先生のふきと
ふりしめとあきと

釋名

寶貝の取つる涼し二足浮長筵

遊道の園大を記す所のあり
ゆきあひしる夜夜

青竹舎

何れもさきくはし上むる其風

南端

月影の接穂もりる柳分素玉

全

月影舎

九重の雲を登く柳分芝馬

四季

壑り接あ糸くくく竹田道 梅鶴

繡の坂あ焦あ暑者

公輸子うユミ 鵲の橋

紫の名、ありて、枯壑、

長春府東北の山

白雲の、ありて、玉浦、

瀾湖

予我兄文

よ、竹、の、文、然、り、ま、ま、

牛、の、ま、ま、切

を、ま、く、振、を、ち、り、胡、蝶、

十年 把柳

又、至

却、向、尔、傾、き、初、ん、冬、至、分、可、及

死、を、乳、明、生、る、

仲、達、を、ま、ま、り、

鳴、き、く、思、へ、と、風、の、雀、を、柳、條

歌仙

自、有、義、の、堂、号、は、此、に、て、善、い、如、か、
又、臺、と、い、ふ、ま、江、貝、柳、條、雜、伯、の、
雷、名、ハ、遠、く、研、か、雪、け、ら、を、賀、し、之、

改、り、く、吟、之、振、乃、は、ま、葉坊 仙、路

あ、と、有、り、鳥、の、轉、柳、條

雁、月、自、情、此、く、お、り、ま、瀾、湖

下、戸、も、破、や、り、歌、破、や、り、可、及

毎、つ、て、も、聲、を、哀、れ、可、い、鳥、啼

つ、け、ハ、鶴、の、ま、ま、紫、の、戸、燕、山

ウ
ま、ま、ち、び、形、も、斜、れ、の、峰、其、柀

涼きくそくの梅は安治川 燕賀
 第ねく追宿よれし橋双六 鳥聲
 尾をすくをく急くお酒 把柙
 外かき酒の心の高衣 芝馬
 採しき又手物下を傘 仙路
 重胎を初らるるし二朝系を 可及
 連かほきく松原の月 潤池
 いとく淋きくその地麻の野 蕪山
 折くお而けい教入 鳥啼

ち短の鳥居も福も花衣 燕賀
 背近のまに梅さする夏 具柳
 けはく名おりけしゆり一 把柙
 けはく名おりけしゆり一 可及
 明も増く越の白山 芝馬
 音の影、凍くわくく、 鳥聲
 舞歌一坐教も如もりも 具柳
 思ひくく立居せりしき 新路
 コナヤ 只と籠き切つる 潤池
 志うましたおの釣枝の故屋 柳條

ぬきうふくを換りて丸木橋 鳥啼

咳拂いしく 庭う長縁 蕨山

毎うも侍久しきりあの日 虫声

月もろく風もあつ入 蕨賀

壱山もをく冷き 秋の色 於海

いせりき 橋の 入巻 把柳

又しき道くくぬ子竹連 於海

一途き日御もくぬ 播子 芝子

おのつり 接木のふ乃くもあじ 一茶坊

さうゆと道に於隔るきまき 柳條

住者やふくを味ひて知柳條雅界
風徳教門の中あ越く作の号を結
其名せ下葉しくくみ登のまより
おり路やよび賀

植終く芽ふく 道の名 白琪

江見は其いふ多風雅か抱ひ
ちろ名都都か普しく 三神の
さぬか抱ひはね孫の号を結めあ
その道の草んてよを祝

路りなきのて刊ル名とく揚の雀 孤山

洛の自有着の流を流し今坐るよ
古の号を結終く又其まゆ一兵のあを
賀し

甚き名 道ふるなるま 雲の兄 淇水

賀 ありき

ら初

日一葉のさかしく香之十寸は鏡 里外

全

名もよく接木のさかき常あらん 紫風

全

松の徳又すくくぬの口の七山 途者

洛の自若翁の流を汲み其
切あつてゆくうの通の席を連り
ゆかり一葉もさかき切あつて
感し祝しゆき

西川

風の連る鳥のそり入るるま 一柳

全

全

梅の芽も香も折流る 吟子鳥 絲綢

梅條風火油の坊乃強き
まらふりゆき

から種も梅の今も異く 牡丹 柳 尾端

こゝろ賀

文臺の初やく涼しニアは浮 尾海

全

梅も香もあつた鶴の名の 賀子里 社花

師翁の流をゆく文臺のゆり
本あつたゆき曾子の送徒か
比しゆく賀

昔もよく伝くあつた道の名 柳絮

香あつたゆき

急すまふ福をさかき 十三里 絲綢

柳も香もあつた 柳條

洲の道もさきの功のあまき
天の地の所至りにはあまかたかく
古来の号は経多の臺をいふ
け道の芳名ありきとす
まゆらき 無心まつてく月のまき 熊弘

磨乃くね糸菜人 而 櫻 田原 秀曉

名をいへる 糸は海を這ひ けり 蝦夷

月系を春物なり 其 其照

道廣く代はる 業人 糸のま 蒼里

香の葉取よりの道廣きまらけり 疑星

接木しき 磨けく玉乃 梅瓜 李谷

此れなり 照り増道さ 糸の 具瀧

天地の如ハ何し 糸 櫻 吾恭

月澄き 朝露白し 糸の 光 妻琴

都鄙の賦 梅の匂ひ けり 下凡 如柳

天明四月の比は毎ふ少きて夢く
あつむらと作之先海の早くと終
ひくこ名和國を柳と賀とて栗丹

唐もく之を喉道し四月の國 露十

全工

松の葉のりくはととん柳うり 一か坐

真加於

門系船着岸と後く

見阿まは家も柳の下しくれ

初文

メト

明くは久亭ふととあり ありくま 嘉栞

公啓もく画くくま 翠年の月 編秀

肩とけは傘ふのまき 明るふ 具態

福澤家の潜

阿くは久亭ふととあり 翠年月 柳條

庄几賀

東武

末廣く夢生に植く花乃宴 登立

柳條主人風雅な植ひのありて
今々先づの道と終自省堂と改
人そく道とまのすくやあし
ふまりしは去子の門不匍匐と一歩
すく年加はりよりく後しと

清き色の菊とて翠年の 花乃宴 瀨石

亜名法光

十みねのくまのあより 月の月

四季混雜

全

枝毎ふと法くま 松のま 縣河

相く 意らと清りまきしのみ 瀨石

白ひくくまとて行より 梅の花 登立

梅咲くゆき糸ゆくさいき大根 東武 秋瓜
青柳の枝るる猫の尻しみら 吏童
柳るれそよ風の羽風る 五明
手写るる大書と拾るる 規 五 柳志
晒するる糸折るる 糸印木 二屯
雲の峯之棟を海へ落つる 阿胤
麻の糸二つ糸束るる 挿入るる 鯉秀
おぼれぬの 碓と糸の 柱と糸 橋川
おのの 後糸白し 梅の糸 南越福井 旭周
名月の中糸人の 糸糸糸 洞波
口歌く糸のこ糸之 今糸の 秋 阿吹

完儿賀

奥列津滙弘前

おと踏え付糸糸の糸糸糸 吳江

曼三章

糸かゝる糸の 燈低し 百合の糸
南瓜の糸糸糸の 菴うな
糸糸糸の 泣子と抱る 門印ろ

賀

京都

名糸弱く 糸糸の糸 柳うな 素勅

世といは通糸一糸糸糸
玉懸菴糸糸糸を賀

石列大國

糸糸糸 柳の糸乃糸糸糸 可登

賀

石列大園

風も柳も行く暮し 柳分 楚江

和分の浦も行く暮し
二十人あふと行く暮し

家も茶も三十一 和分の浦

去路もさういふ暮し

修もぬもさういふ暮し 和分の浦

和分の浦

盃の日も行く暮し 和分の浦

父の泣き声も行く暮し

月も行く暮し 梅見分 亀猷

一の谷も行く暮し

松も行く暮し 塚の暮 柳條

世々あつた後継りの後継り
さういふ賀

備前岡山

吹ぬ日も行く暮し 柳分 市笛

形坂山も行く暮し

いとあつた川船坂の山 渡り

四季

全

孫も行く暮し 柳分 孤鴻

七十三

卯の足も行く暮し 出し 札

尾寺も行く暮し 和分の浦

本も行く暮し 和分の浦

全

全

茶の足も行く暮し 和分の浦 孤葉

牛の子之終をわかれに親あつち 孤蘭
虫のつらき舞もぬ家もつらき人
物もあつちぬし屏風之冬花

完儿賀

全小方

喜多津く世の安んじ之子の海 素友

全

全長寿

月影もほろり硯のぬりて 南鏡

全

全益原

兄と呼ぶ日地梅の手撫ふ 黄紙

影柙

孔雀舞又をく 風の糸柙 素友

四節

急のうき、清き所へしお産
風も借ぬ灯も瓜むらん梅の雪
面白きおきき之月のまじり
初言ふおきり、空居の網ふ

完儿賀

全八塔寺

接穂も匂いづのたかき之ま 知十

全

笑もけり名も多し 壱の苗 鶴尾

全

日取

おのつらき道も匂ひつた花のま 五勢

又隣国のこと

あはれも男あはれと云ふはさきの道 子孫

四節

り出りかへし 彩々 初梅 知十

入日々あはれ 眼見と郭云

鳥栗々 枝のをき 冊波互

鶯 鳴る 尾の跡 産む 岩のま

初暮雨

降る々 枝へ 蛙乃 洗濯日 柳條

郭云

あはれハ 羨の 水知 ぬ なく みる

先づの平と洲かまををを

従て流すゆ 汁糸かよ 條子の

芳名を 賀し

播列依用

先動く 柳を 道の 葉りな 里山

全 芳の 幸畧

全

吹 傳ふ 風の 道守く 柳か 桃仙

全

全

あはれり くの 村園の 接木か 梅芽

至月の ぬし とう くの ぬし

半の 祝し さい くの さい

全 女

あはれり くの 風あ 空あ 柳か 冬松

み 堂を 祝し

短 吹く すがり 小葉 入 葉の 至 里山

梅の白ひき目こ十寸流 貞枝
 亦あつこし 吾解の川 柳條
 掛高き遠く吹ぬ 風吹く 桃仙
 札の煙ハおのつこ 並 亭仙
 うつろ男の腫まゝ年一聖の線 花枝
 うく春待つはくまをさあ 清泉
^ウ 流石はる鳥 能証
 画く象を併ちのぼく 龜猷
 よ赤くく神をけこくくみ 燕賀

腰てルウをなすあまの招 潤湖
 静家ホ赤くくく 長彩 鳥啼
 世ハとれうの昔方せぬな 素良
 涼しき源ハ柳の桔槔 和曉
 藤の松をけふまの月影 五景
 藝云ル方地情むるの臨はれ 松月
 ちまれくこの埃をさる 如柳
 鳩よあつた 雲ふく 素琴
 桃季

茶鳥のたをせふ弘法さん
今乃井野

ころ定の衣紋その月ねる 麟趾

全 ともカ署 全 佐用

兄のふ尔負ぬさくしの白ひび 醉月

全 味のみ墨江の海を以 今 振海

うちのぼるし 札芳 梅のふ 十歩

先達の跡を傳のつづ月者ま
あ代不易の芳名くんとま祝 全 赤松

きさより 堅さつ員より 師名芳跡 雄二磨

全 全 手福

功積く 開く之道の梅様 曙の

つふあ三月あ

途きつものふねせあり 一巻一和 柳條

雑修のけをなとて臺
つぎあつとす祝意を送る 小居

色も多し 三十と毛積に 却之 是 有破

全

本巻より 雑修のつら 花の積 牛策

全

涅槃のま 小坊を流ま 和 有破

明くを 振くま あり 十巻の 雨 牛策

あつて 物忌は けさく 牛策

あつて 降く 増を 出のる

更衣

あつて 浴を する 衣之 有破

更衣

山よりあまきふるはるの雪の 文衣 牛策

水鶴

水斗起るる鶴に一夜の雪の 水碓

池邊ニ草

影移るる月の光の影の 雄鷹

涼むる月の影の月の光の 柳條

立秋在甚

夕秋の光の影の月の光の 熊趾

暮るる風おりの蝉の秋の吟 梅芽

全

秋あまき蝉さするの一糸糸 柳條

賀

梅より梅の影の月の光の 如蟻

川サキ

全

思ふるる月の影の月の光の 常風

全

思ふるる月の影の月の光の 常風

全

思ふるる月の影の月の光の 常風

全

思ふるる月の影の月の光の 常風

玉葉盆

又母を恋ふるる月の光の 如蟻

社

苦瓠

蝶のまじり舞もさぬ月くしくれが 梅芽

備前山田

今更くふか道らるる曆も 柗糸

全

豊野

富士の松之葉彩る朝りの心 應之

全

八日市

ささく妻の代まるる家楳 三洞

又月雨

若葉背て船も眠る又月雨 潤湖

あゝ久系川朝々又月雨 松十

憎苦若蠅

叩けさく 蠅のさるさ 柳條

四季混雑

十

子し如く波も手繰のあさり 素琴

あはれと道の林しき流るる 松月

お傘之に神々のあしな 吾恭

任はるもあおの磯碛の空の声、

隣りしあはれ問うる去用干

皆人のあはれもあまの月

九手は朝日る朝の意遠六

あはれおの素き子し神の梅 如柗

招く物も子路りあはれ片の心 貞流

招ふ物もさしあはれ冬至梅 非熊

備前山田

全イナナキ

あり鳥々風は病にぬ 波の音 ハラ 蟻友
 壑の宮乃秋をなみ 一糸 ハ 糸
 素秋の民の竈の 新堂を 龜猷
 志山に風はよのふ 一糸 柳糸
 池の府を動かす 寸みる 芝言
 糸綿を糸糸と不二の 糸あり
 易さうとそんやうき 茄子糸 把柳
 と新風の 纒とくマ 一糸 舟 蟻友
 糸糸人糸糸 桐の一糸 ワ 糸 麦芝
 糸糸 得奥忘笠 糸糸 案山子 ハ 糸 柳糸
 糸糸 矢鴻扇の的 糸糸 舟 蟻友

四季混雑

糸糸 國々 糸糸袋 糸糸 糸糸 カラク 如探
 糸糸 人々 糸糸をつら 柳摩文
 山吹ハ 糸糸の中 糸糸 小野 江見取 牙
 糸糸 糸糸 山糸糸 糸糸 清水糸 十一 和曉
 糸糸 糸糸 糸糸 糸糸 糸糸 ツマニ 枝生
 十界の糸糸 糸糸 糸糸 糸糸 和田 芝言
 推の糸糸 糸糸 糸糸 糸糸 夕井 如及
 糸糸 糸糸 糸糸 糸糸 糸糸 糸糸 徐柳
 糸糸 糸糸 糸糸 糸糸 糸糸 糸糸 露石

めると詠ふ金糸細く佛の坐 カニシ 掬水
とよと吹風のわらわく梅の交、 具示

挨拶

落合

りよふ来以並ふ名なりしを玉梅 龜北

春日真

タニト

降矢嘆りせむと梅の濼 百柙

柳條大糖文意の

いと半りせむ

傾カ

石川大玉

ふとのさふ

とあふして梅の白む哉 楚江

歌仙

立秋五る十七日

あはらるる月竹ぬるふ立田姫 龜

園もいさく控葉 や 梅芽

桐の奏くとも風呂の洒くし 柳條

む石傳ひきせ枝葉 も 猷

被た敷とたりのけ 梧檉 芽

右よ居しゝるわき齋の通 條

鳥 ワ 法の子あふ京山 猷

ゆらぐ花葉も候のせなすわ 芽

物束のおも寸と若又癡 う 猷

歌詠人よりこんと交瘼
 ありて懐懐しるる世の事
 そよぐ春も寂のあはれ
 云花野の狗もてまゝのそ
 軍陣もたひ一ふ逐水
 一ふ心く懸籠の病りま
 矢立の墨の乾ぬも嘆
 又らまやけの所なきのな
 雲の海、 晩煙の汐
 切几巾の子表取らあはれよ

條、 猷、 芽、 條、 猷、 芽、 條、 猷、 芽

急下るふふらつらきの山
 叶わらぬ小龍も思はあはれ
 降童ふぬしそ夏の改之
 うくうの泡も涼しき紅川
 さりし堤もあは天の音
 我も昔あはれ負ふ生路は
 ユまふ物もハ眼も物も
 白の玉もあはれ秋の風
 月のあはれ虫の歌
 起臥のあはれもももも

猷、 條、 芽、 條、 猷、 芽、 條、 猷、 芽

何れも感しんことくと刺
 五中ハ憂慮ハレ 魂カシラ
 固治ツクク 月ハ不夜城
 とうらひも 鏡前ハ舞リ 振
 鳩ト他トシテハ 強勳トシテ
 勇ハ健キト奉ノ 初登谷ノ水
 題也 流ト糸持ト 朝 暮

賀

妻の夜ハ月ナリ 妻ハ明クモ

不潔ヲ

固ク一枝ノ葉トモ糸 柳

糸福

子烟

道廣ク子トモ地 孫ハ柳ハ

全

猷母

秋寂ノ底ト 灯カキテ 白お合

星夕

龜猷

十ノ里ノ村モ ありて 二ツ星

多ク 思ハ 後ハ 晴ト 涼ノ 澤

其思

人ナク 不始ト 何ト 人星 逢ハ

熊趾

立吾ノ 乾モ 流ト 川

柳條

久月ノ 船ト 船ト 空ノ 鳥

題 船鳥

猷母

四季

故子羽

船を移す毎の岸より梅の花
涼しくは帆もあつぬ
氷

誕生の賀

礎を露子正木のうらら

七五七

人マ呼ぶ朝三寸の雲の古

歌

山子歌集

初孫

障木くく家色こり
羅人

晴る谷

人目

陽り々神の後葉尔佛の性
柳條

有るる白と黒い

我道の影をうねる子始

舟中吟

忘れてハ表紙とそふ海の日

障菴入吟

春の心々百里の夏の足心

郭云

羽子の羽は何処の神もえ郭云

備後三島古歌

夕暮じり
若のうき舞ふ如も

田植

味う所表紙中あつ
甲植唄

能く乳を呑むは授くおしりか
おしりか
柳條

月々るる
おしりか
おしりか

おしりか
おしりか
おしりか

破子て
おしりか
おしりか

まじり
おしりか
おしりか

そら
おしりか
おしりか

おしりか
おしりか
おしりか

美作の國は夏氏を其の長
士門を出さず其の耕す今
此柳條子や此此女みて洛下
自者るお乃堂小入り高名
志流子たり志の乳よち加記
此業を家嫡よゆい風流子
遊し自者此号をまゝく此遊

海なる家おもふふくし免士よを
出さず説師ともり又地の流れ
形るすれやまののしおれつ
菫備せる宗匠ありりと浪華
浴泉庵鳥堂

竹梅篇

天明元

